

## 第四部 ◆ 身心変容技法と心靈的体験と洞窟

# オーウェン『自伝』他の未邦訳部分

## 解説と抄訳

津城寛文

筑波大学人文社会系教授／宗教学・神道行法研究

### はじめに

ロバート・オーウェン (Robert Owen, 1771-1858) について、短い事典項目では社会改革者、空想的社会主義者とされ、やや立ち入った記述では、晩年のスピリチュアリズムへの回心が指摘されている。海外での研究状況について、私はまったく見通しがきかないが、日本の学術的なオーウェン研究については、五島茂が、文献その他の資料整理、『自伝』その他の紹介翻訳、そして基礎研究をリードしたが、私見では、そのやや偏った作業によって、一面的なオーウェン像が構築されているように思われる。『偏った』というのは、初期の社会改革思想から、晩年のスピリチュアリズムへの回心が、全面的に否定的なものと捉えられていること、それ以前に、翻訳紹介の段階で、作品の偏った取捨選択があり、さらには独立した作品において、大幅な削除があること、である。

一人の思想家には、「回心」とまでいかなくとも、一般論としても、多面的な思想があり、研究者（読み手）の立場、視点から、それぞれの価値評価をするのは、当然のことである。しかしそうした多面的な文書を、翻訳紹

介作業の段階から、一定の意図で取捨選択、削除編集するのは、基礎作業として、説得性、公平性に欠けるところがある。とくに、重要な思想家の場合、重要度に応じて、文書が、草稿やメモを含め、網羅的に収集されるのが通常である。英文の著作集四巻は、その意味ではかなり網羅的である。

論争のあるテーマについて、批判、評価する場合、何を否定し何を評価しているのか、まずは判断材料を偏りなく示し、主張に有利な材料も不利な材料も、広く提供する必要があるだろう。

### 1 解説

五島茂は『復刻版・ロバート・オーウェン著作史』において、文献を「各段階に濃厚な特徴をとらへて」、「つぎのように五期に分け、各文献に「内容」「モーティーフ」「本邦における所在」、ときに「批判」「影響」を記したものである。

第一期「オウエニズムの生成」(1771-1814)

第二期「オウエニズムの発展」(1814-1824)

第三期「空想的コムミュニズムの展開」(1825-1828)

第四期「無産階級オウエニズム」(1829-Sept. 1834)

第五期「オウエニズムの方向転換」(退却と抽象的爛熟) (Oct. 1834-1858)

第四と第五の期間の変わり目が、月レベルで細かくなっている（一八三四年九月と一〇月のあいだ）のは、やや異様な印象を受ける。この切れ目は、一八五三年に書かれた二つの記事から推定されている。

一つは、「性格の形成——あるいは人類の訓練と教育 (The Formation of Character: or Training and Education of the Human Race)」と題され、その「後半は八月三十日の靈交記事」を書いているので、九月以降の刊行になる。もう一つの記事は、「人類の将来 (The Future of the Human Race: or great glorious and future revolution to be effected through the agency of departed spirits of good and superior men and women)」と題され、「十一月十日近くに発行された」。その「内容」は「人類の将来には偉大なすばらしい、だが平和な革命が必ず起る〔……〕それらは今は地上にないすぐれた善き男女の心靈の力によって将来される」というものだっ

た。この二つの記事の執筆、発表時期によって、一八三四年の秋が、第五期の「心霊主義」への転換点とされることになる。

「批判」の部分は、高く評価しているものと、多少とも批判しているものがある。前者の例としては、労働組合に関する講演を「歴史的な至重さをもつといつても過言ではないであらう」など、数多い。

他方、後者は少なく、ジャマイカの奴隷人口に関するレポートに対して、「Owenは、ここでは家父長的、といふよりむしろ反動的だ」、ある社説への反駁文に対して、「Owenの主張は彼の単純さから甚だしき愚論になっている」、ある公開討論に関して、「討論者としては Reebuckの方が数等秀れてゐた」などがある。

ところが第五期に関しては、この「批判」が、苛烈な「否定」になる。一八五四年から翌年にかけての「地上における人間の新たな実存 (The New Existence of Man upon the Earth)」については、「内容、批判」としてとりまとめられ、つぎのようにネガティブに述べられる。

自叙伝の草稿と見るべく、自叙伝成立過程を見る至大な資料ではある。だが注意せよ。この八部に収められたる自叙伝的部分は、あくまで地上における人類の新生存を裏づける心霊主義的論述であり、解釈であり、証明であるにすぎぬ。従つてここにあらはれるOwenは心霊主義者Owenであつて自叙伝第一巻のOwenとは全然面目を異にする。

しかし、最後の運動機関紙、一八五六年から死去する五八年までの「至福千年期新報 (Millennial Gazette)」について、「心霊主義的傾向が濃い。彼がいかに本誌に執着してゐるかは自叙伝の序の対話でも瞭らかだ」とあるとおり、自叙伝と心霊主義を切り放そうとするのは、無理がある。オーウェンの社会的ビジョンは、初期から晩年まで、一貫性がある。一九世紀の後半、「多くの社会主義者がスピリチュアリストだった」のは間違ひなく、この観察を無

視しては、社会主義の要点は見失われるだろう。私はオーウェンの一貫性ある自己理解に沿つて、オーウェンを理解したいと思う。

一八三四年は、オーウェンはまだ六〇歳代であり、死去する一八五八年までには、二〇年以上ある。五島が、「退却と抽象的爛熟」として批判的に位置付けるこの長い期間は、好き嫌いを別にすれば、むしろ思想的な高揚感がみなぎっている。

第五期は、『ロバート・オーウェン著作史』では一八三四年に始まるとしていたが、別の一般書では、「一八五三年からオーウェンは、長男ロバート・デイルのすすめで、心霊主義 (スピリチュアリズム) に帰依した。忙しい活動のあいだに、昔のパトロンであるケント公殿下や知友たちの霊と交流した」と、二〇年ほどのちの最晩年のこと、しかも息子のイニシアティブによるものとして、偉大な人生の末期、憐れむべき、慈しむべき、例外的な逸脱であつたように、述べられている。著作史からみても、これは正しくないだろう。

時代の特定は、文書や事件の細かい整理が必要になり、素人が簡単にできる仕事ではない。しかし、理性や霊性が衰えていたかどうかは、文書を読むことで判断できる。ここでは、晩年の「至福千年期新報 (Millennial Gazette)」について、五島が「心霊主義的傾向が濃い。彼がいかに本誌に執着してゐるかは自叙伝の序の対話でも瞭らかだ」と説明している、そのオーウェンの「執着」を示す「自叙伝の序の対話」に注目してみよう。

「自叙伝の序の対話」というのは、『自伝 (The Life of Robert Owen)』の冒頭にあるもので、二篇から成っている。一つめの「ロバート・オーウェンとその旧友の一人との伝記執筆に関する対話」は約九頁、二つめの「第二の導入的対話」はかなり長く、約二四頁になっている。

その二つめ対話は、最後の数頁で、「人類の未来を全面的に変えるという試みが、最終的にうまくいくと貴方は確信しておられる。その根拠は何か？」と尋ねる審問者 (Inquisitor) に対して、オーウェンが「成功が確実になるまで効果のある援助をすると約束された卓越したスピリ

ットたちがいて、私は日々その手助けをいただいている」と答える、多少とも人を驚かせるような問答がある。「それはすべて貴方の心の妄想ではないのか？」という審問者の感想は、多くの人の反応を代弁しているに違いない。それに対してオーウェンは、妥当性、真理性、有効性を判断する実例として、「世界へ向けた演説」という「スピリットからの通信」を「公衆の利益のために公刊しよう」と、対話を締めくくっている。

それに続いて、スピリットからの世界へ向けた演説が、オーウェンの解説とともに、七頁にわたって紹介されている。

オーウェンの自伝は、五島茂訳の岩波文庫で、『オーウェン自叙伝』として刊行されているが、この二篇の対話も、オーウェンの解説文も、「スピリットからの通信」文も、また晩年の記事を多く含む、第二巻の材料となる草稿部分 (約三八頁) も、カットされている。分量の問題だけではなく、それらが「心霊主義的傾向が濃い」として、望ましいオーウェン像に有害であると判断されたからである。「すべて貴方の心の妄想ではないか」と言われることを承知の上で、老いてなお意気盛んなオーウェンが、あえて「公衆の利益のために」と断つて刊行した部分は、どのような内容だったのか、少なくとも資料として、確認されるべきものである。

「妄想」は、神秘主義の気質を持った人、あるいはパラノイア傾向の人に、起こりがちである。アイデアに溢れ、かつ実践的なオーウェンは、パラノイア傾向がないとは言えないかもしれないが、神秘的なものへの好みは、まったくない。世界観や真理想について、「神秘なく」という言葉が、中期から晩年にわたってしばしば出てくる。

「スピリチュアリズム」がしばしば「神秘」とされるのに対して、オーウェンは死者が生存していること、死者とのコミュニケーションを、「神秘」とは考えていないのである。オーウェンはいわば「神秘なきスピリチュアリスト」である。

つぎの第二章では、自伝原著の未邦訳部分のうち、「第二の導入的対話」の最後の一頁、スピリットによる「世

界へ向けた演説」全文と、それを紹介するオーウェンの序文「スピリットからの通信」全文を、訳出、紹介する。<sup>11</sup>「世界へ向けた演説」のキーワードは、すべての人に必須な必要物 (essential wants)、自然な必要物 (natural wants)、納得できる労働 (agreeable labour) ということである。すべての人類が、適切な労働で、不足なく生活するという、シンブルなアイデアは、オーウェンその人の基本的な主張そのものである。

続く第三章では、再晩年の機関紙、『至福千年期新法』六号（一八五六年七月一日）から、「スピリチュアリズムと社会主義の結合」と題する、スピリチュアリズムにして社会主義者のマニフェストのような文章を、翻訳する。<sup>12</sup>「全生涯に及ぶたくましさを示した」が「惜しむべし」<sup>13</sup>とされる、社会主義と心靈主義との接点を知ること、社会の「具体的」な側面に偏ったオーウェン像は、多少とも描き直されるだろう。

## 2 自伝の未邦訳部分から ——「スピリットからの通信」その他

### 【第二の導入的対話】

「……」

審問者——これから将来にわたり、人類のスピリット、マインド、実践、状況を、全面的に変える試みが、最終的にうまくいくと、貴方は確信しておられます。では、その根拠は何ですか？

オーウェン——成功が確実になるまで、有効な援助をするとは約束した卓越したスピリットたちがおられて、私は日々その手助けをいただいているのです。

審問者——しかし、それはすべて貴方のマインドの妄想ではないのですか？

オーウェン——こういうインスピレーションの現象に、なじみのない部外者は、そう思うかもしれません。しかし、私が目撃してきた、また何千という人々が日々目撃している事実のエビデンスがあります。それはまことに強烈なものであり、そうした経験なしにエビデ

ンスを否定する人々は、そのままではできません。やがて、すべての人々は、それらが真理であること、人類を再生するにあたってきわめて重要であることを、信じざる得なくなるでしょう。

審問者——これらの問題について、貴方と論争しても、仕方がありません。貴方はマインドにおいても実践においても、まったくブレることがなく、古いシステムが真実で安定していると信じる者が何を言おうと、影響されませんから。

オーウェン——貴方はまことに正しい結論に到達されました。過ちの上に建てられたシステムを、私はよく知っており、その過ちは、システムから派生するすべてのものにまで、広がっています。そのようにして出てきたものに、私は信を置くことができません。

審問者——貴方は、ご自身が唱道する新たなシステムの真実と、それが最終的に成功すること、またそのための手段を追及するよう貴方を賛助し鼓舞する奇妙な存在たちがあること、これらがたいなる目的のために価値があることを、強く信じておられる。それはこの時代の考えをはるかに超えたもので、貴方もご承知のように、古くからの友人や信頼できる弟子の多くは、貴方がいわゆるスピリットの出現 (spiritual manifestation) を信じていることに、強く反対しています。

オーウェン——彼らの反対はよく承知しています。しかし彼らが正しく、私が間違っているというエビデンスは、何もありません。私は本日、卓越したスピリットたちからの通信を、合衆国の経験豊かな霊媒を通じて、受け取りました。「世界へ向けた演説」と題された文書に含まれているのは、今日のいわゆる最も進歩的リベラル派よりもはるかに進歩した、原理・原則と実践的な教えです。そこには、最も前に進んだ人々、最も経験豊かな私の弟子たちにとってさえ、教えるところがあるので、公けの利益のために、私の存命中に公刊いたしますよう。

一八五六年十二月

### 「スピリットからの通信」

以下の演説は、私がたった今、合衆国の人々から受け取ったものである。その人々の生活は、肌の色や信条、国や階級にかかわらずなく、人類全体の大いなる目的のために、捧げられている。それは原理・原則と実践において最も進歩しており、私がこれまで知っている、いかなる目に見える、あるいは不可視の団体よりも、ずっと価値ある常識と正しい理性を含んでいる。あらゆる点から見ても、それは他の何よりも、世界の進歩したマインドの持ち主たちの深い考察に値する文書である。

しかしながら、この演説の以下のような部分に関して、私は意見を異にせざるを得ない。それは、誤った悪しきシステムを、真実で善良なシステムに変えて、人類の性格をよりよく形成し、人類をよりよく治めるために、政府が果たす援助への期待を、まったく無視していることである。

すべての政府と、そこで働くすべての職員にとって、システムを変えることが、最も高邁で、最も永続的な関心事であることを知っているゆえに、私は演説とは意見を異にする。

人間が間違った場合、その原因は個人ではなく、無知で誤った良からぬ社会システムにある。個人は生まれて以来、そのシステムに取り巻かれていたからであるゆえに、私は演説と意見を異にする。

団体に何か間違いがあった場合、彼らは非難されるべきではない。彼らにたゆみない慈善精神と愛をもって教え、その教えが忍耐強く真実であるならば、また良識をもって、あるいは彼らのおかれた様々な状況で、人間の本性はどうなるかという知識にしたがって教えるならば、彼らに間違いを悟らせることに成功するであろう。このゆえに、私は演説と意見を異にする。

真実を教えらるべき人々に、不信任や怒りを抱くことは、賢明なことではない。彼らを誤りから救い出し、その原因となっている有害な事柄から、救い出すことが必要である。今日すべての政府はこの状態にある。このゆえに、私は演説と意見を異にする。

私がやむを得ず、スピリットの演説と意見を異にするのは、これらの理由からであるが、その他のすべての点においては、この演説は、金や銀をはるかに超えた価値をもつと思う。

そこに含まれる偉大な諸真実に関して、それを口述された卓越したスピリットたちに対して、またそれを聞き取って書き留め、私に送ってくださった霊媒に対して、私は心からの感謝を捧げるものである。

一八五六年一月二日 ロバート・オーウェン

### 「世界へ向けた演説」

「あいだに置かれた山々は、国々にとって敵となる。

狭い入り江で切り離された土地は、互いに憎み合う。」

(ウィリアム・クーパー)

観想的な心 (contemplative mind) にとつて、この地球上に暮らす者たちの現状は、何と悲しいことか！ ほとんどのすべての人、町、徒党、部族、国が、全体の善と関心から分離した、それぞれ個別の利害関心を追求している。すべてのものの上に、「私のもの、貴方のもの」という文字が、はっきり書かれている。国籍や肌の色や性別にかかわらず、人としての人に対する共通の福利、深く永続する利害関心は、どこにもない。したがって、わずかな数百万人の生活を維持するために、莫大な量が求められている。今人間が知らねばならぬのは、自分の利害関心を他者の利害関心と結び付けるために、どうするのが最も良いのか、労働を魅力あるもの、合意できるものにするには、どうすれば良いのか、ということである。

一定の必須な物の概要を、手短かな形で示すのが、賢明なように思われる。この概要が理解され、順守されるならば、人と人を仲間として、よく結び付けることが、十分できるようになるだろう。そのような真剣な関心事を主題化するに際しては、物事の性質上、多くの小さな問題点は、いちいち取り上げることができない。網羅的な考察のためには、短い論文ではなく、一卷の書物が必要になるからである。

人間には一定の自然な必要物 (certain natural wants) がある。それらの必要物が供給されないと、彼は落ち着かず、不安で、不満足な存在になる。彼にはつぎのような物が必要である。まず、その上に立つことのできる土壌。その権利は、明らかで争う余地なく、永遠である。つぎに、土壌の上に建てられた、快適で便利な住まい (shelter) が必要である。三つめに、一定の必須な栄養物と、快適な衣服が必要である。四つめに、最も広い意味で、まさにそう呼ばれるべき我が家 (home) が必要である。五つめに、自分のまわり、さほど遠くない便利な距離に、納得できて魅力ある社会あるいは隣人が必要である。六つめに、彼の肉体の健康、心の成長、愛情の開花を促進する、一定の環境が必要である。七つめに、彼の将来の運命がいかなるものであれ、あらゆる不吉な予言から、完全に解放されている必要がある。

高度に、純粹に、そして広い意味で、これらが与えられるならば、最も純粹で神聖な状況のために、絶対に必須 (absolutely essential) なものを、彼は享受する。七つのうち六つだけ与えられて、何かが欠けるならば、その欠如の度合いに応じて、彼は満足できず、求めて止まず、持たないものを得ようと、もがき苦しむ。知性的な読者の心が、これらを全体として見るならば、そこには必須物が含まれるだけでなく、すべてが必要なものであると、わかるのではあるまいか。

さて、この世界を、そのあるがままに見渡して見るがよい。ほぼすべての人が、このうちの一つ、中にはこれらのほとんどを、剥奪されていることが容易にわかる。これら必須物 (essentials) が欠けているがゆえに、人間は自分の仲間であるべき人間を、餌食として貪り喰うのである。彼は確保できていないものを取ろうとして、手を伸ばす。これらの自然な必要物が供給されたならば、個人間の戦争も、国々や居留地間の大騒ぎも、なかったことだろう。普遍的な平和と人類全体の善意を増進しようとするすべての努力は、人間の自然な必要物が供給されないかぎり、物事の自然の理として、失敗するだろう。

幾人かの博愛主義者のなかに、戦争をなくそうとする

願望が広がりつつある。地上の国々が剣を鋤に、槍を鎌に打ち変えるように導こう、国が他の国に剣を振り上げず、もはや戦いの技を学ばないような状態を作ろう、そういう願望である。いかなる文筆家も、戦争に由来する罪悪がどれほどになるか、かつて見定めたことはない。しかし、戦争と闘争はいったいどこから湧いてくるのか？戦争は二つの国々のあいだで布告されるが、宣戦布告は、それ以前すでに戦争状態にあったものが、ただ噴き出しただけである。闘争は「内面から」始まり、しかるのちに宣戦布告される。何かの結果があれば、背後に原因がある。周囲を見回して見るがよい。大砲や剣は見当たらず、皆は建っていないかもしれないが、それでも、そこには「戦争」がある。あるいはもつと身近な国内の関係に目を向けると、集団間で互いの頭を吹き飛ばしたり、首を刎ねたりすることはないかもしれない。あるいは、なんとあれ野蛮な暴力で互いを切り刻むことはないかもしれない。それでも、そこには「戦争」がある。逆に、身近な世界が我が家 (home) となっていれば、戦争はそのドアを開けて入ってくることはできない。必要なすべての栄養物や衣服が、必要とするだけ手元にあるならば、また身体、健康、メンタルな成長、愛情の表現のために、環境全体が適切で調和的であるならば、戦争をすべき何の理由もない。これらの必須物のどれか一つが、ある集団から取り去られると、国内で戦争が起こる。

小さな事柄で大きな事柄を説明することが、時として有益である。戦争は天国の門に侵入できない、そのように、必須物がすべて供給された近隣社会に、戦争は入りこめない。じつは、近隣社会が天国なのである。しかし、万人にとって必須なものの一部を、一部の隣人が楽しむのために用いると、競争や闘争や戦争が現れ、隣人同士が互いを貪ることをあれこれ企む。同じ法則が、植民地、地方、州、国においても、当てはまる。かくしてアメリカ国では、いつでも起こり得ることが、今まさに起きて、市民戦争の状態にある。建物の屋根から炎が噴き出したときが、火事なのではない。すでに内側に火が回り、住まいの必須物をすべて焼き尽くしていても、屋根には何

も見えないことがある。内側に癌があつて器官が侵されているかもしれない人を、癌と判断するのに決定的なことは、それが外から見えるかどうかではない。

アメリカ国の戦争は、どうして起こっているのだろうか？ 答えは、その国が基と宣言した原理原則(Principles)が、まったく無視されていることにある。その原理原則とは、人は奪うことのできない、生命、自由、そして幸福の追求、といった権利を持っていることである。これらが十分に満足のいくまで与えられたならば、人はそれ以上を求めない。人の生命を奪い、人からあれこれの自由を取り上げ、人が思いのままに幸福を追求することを妨げるならば、その人は何か欠けた状態になる。この欠如が、休みなく何かを追い求め、欲望する生き方を形成する。しばらくこうして持ちこたえるが、やがては軛が重くなりすぎて、結果はつぎのようになる。まず、抑圧された者はどん底に押しつぶされ、筆舌に尽くしがたいうめき、涙、苦しみを味わう。つづいて、押しつぶされた者はどうにかして軛を外そうと決心して、戦争や略奪や流血が広がる。国は国に対して、互いに軍隊を配置する。通常の労働は脇に追いやられる。すべての事柄が、解放というただ一点を目指す。通常は弱いほうが押しつぶされて終わる。あるいは、そうなる前に仲裁が入ることがあるかもしれないが、原因が取り除かれたわけではないので、遅かれ早かれ、ものの道理として、別の戦争が勃発することになる。したがって、この類のことを丸くおさめようとする企ては、まったく無益なことである。それぞれの集団は平和を求めるが得られない。和合(union)を求めるが得られない。調和を求めるが得られない。事柄の自然として、人の必須物が供給されない限り、それらはあり得ないからである。

「では何をすればよいのか」と、博愛主義者は問うことだろう。「平和を促進する努力がなされるべきではないのか？」もちろんそうである。しかし誰であれその仕事を企てる人は、諸集団に対して、「貴方がたには何が必要なのか？」と問わねばならない。そしてそれらの必要物が充足されたならば、平和を作り出す者は最後の審判の日

まで安らかに眠るだろう。それ以上することはないからである。これらのはつきり自覚されるまでは、家庭内において、近隣社会、地方、州連合、最大規模の国においても、永続する平和は、まともに期待できない。

戦争と平和の主題を、この平易で常識的な見地から見ることが、現在においても、将来においても、道理に叶っているだろう。戦争が、ただ仲裁によって沈静化しているだけなら、その沈静化は永続できないとわかる。なぜか？ 内なる平和がないから、聖なる平安がないから、諸集団が持たざる何かを外に求めているからである。したがって、物事の「表層」に留まっていたは、もはや役に立たない。人類の必須物を知的に理解することが、より賢明なことである。必須物が供給される度合いに応じて、内なる平和が確かなものとなり、表面の噴火も見られなくなるだろう。

このような根源的な性格の仕事は、きわめてゆつくりと進めねばならない、という意見がある。たしかに、徹底的な改革はすべて、現在の状況によって反対されるであろう。端的に考えると、逆説的に見えるかもしれないが、平和を創り出すとするこの種の行動は、宣戦布告と同様になるだろう。ある人はそれを、哲学的に「私が地上に來たのは、平和をもたらすためではなく、火を付けるためである」と言った。その火が付けられたのは、屑を燃やすためである。銀から混ぜ物を分離し、純粋なものから不純物を、愛すべきものから利己的なものを、真実から虚偽を、善から悪を分離するためである。では、それどのようなのか？

最終的な到達点である、永続的で普遍的な平和の観点から見ると、これらの付随物は、せいぜいクモの巣くらいのもので、大して重要なものではない。それらは人々を助けて事柄の真実を見るよう、見えなかつた目を開くよう、促すものである。時として、内なる和合がなく、何か不和の種があるような場合、人に胸が張り裂けるような思いをさせ、優しい絆を断つことがあるかもしれない。それは、眠っている真下に火種があり、いつか思いもよらない時に炎が燃え上がる状況にある人を、そこから救

い出すためである。地下室に火が付いていて、やがて屋敷全体が炎に包まれると知っていながら、眠りの床に就こうとする、向こう見ずな人がいるだろうか。そして今日の世界は、まさしくこのような状況なのである。

弱小な国は宣戦布告する勇氣はないかもしれないが、強大な国はあえてそうするだろう。それは、ある人が相手の弱みに付け込もうとするのと、同様である。こちらは個人主義と呼ばれ、あちらはナショナリズムと呼ばれるだけの違いである。国と国はひとしきり戦い、疲弊して、人命が失われ、財産が没収され、無数の心が張り裂け、戦闘員がしばらく撤収し、ある種の交渉が行われ、停戦が宣言される。こうして外面上は、すべてが静かに見える。しかし内面では、火種が今も燃えている。なぜか？ 人間の欠かせない必須物が、供給されていないからである。政治家の言い方ではないが、問題をよく考えてみよ。博愛主義者がするように問題を調査してみよ。すべてがこの一点に帰着することがわかるだろう。どこかの誰かに、必要な何か欠けているのである。そこから、必要物を得ようとする闘争や努力が出てくる。それを持った人がいると、その人から奪おうとして、戦争になる。

平和の親友となるのは、争いの諸原因を熟考し、それらの原因を取り除くために、広範で網羅的な計画を作る人々である。しかしこの種の努力が広がっていくと、古い制度機関のあれこれは、掃さぶられることになる。諸国の基盤となっているものが査察され、広範で実際的な計画が提出されなければならない。悪を理解するだけでは十分ではない。それを除去する能力が必要である。悪の原因を一撃で打破して、別のものと置き換え、新たな状態を導く必要がある。その新たな状態のなかに、調和と平和、和合と愛が住まうであろう。

治療は、患部全体を覆うのに十分な広がりをもたなければ、少なくとも人を欺くことになり、期待だけさせて実効性がないと、治療前よりもさらに悪い状態に落とし込むことになる。

腕のよい医者、頭のよい外科医は、まず注意深く患者の状態を調べて、できるかぎり諸原因を明らかに把握し、

それらを適切に除去しようと努力する。悪いものがシステム内に残ると、それは拡散し、腐敗し、毒となり、やがては患者の生命を危険にさらすことになることを、よく知っているからである。したがって、邪悪なものは緩和されるだけでは不十分であり、社会全体から徹底的に除去されなければならない。そうしないと、遅かれ早かれ、政治的な意味での腐敗や病氣、死に至るだろう。

こうした性格の主題を見渡すために、つぎのような質問をしてみるのも、まったく愚かではないかもしれない。まず、抑圧する者たち自らが、他人からの援助なしに、自分たちのしていることが悪いことだと理解し、ただちにそれをやめて、正しい方向に歩み出す、ということはあるだろうか？ つぎに、抑圧され打ちひしがれた階級の者たち自らが、統一され体系化された何らかの努力によって、自分たちを苦しめている軛を、知性と体系性をもって、投げ捨てる、ということはあるだろうか？ あるいは最後に、比較的に恵まれた状態にある第三の階級が、抑圧する者と抑圧されている者のあいだのバランスをとるために、何かなされるべきかを明らかにする、ということが必要だろうか？ 抑圧の本性には欺瞞的なところがあつて、抑圧された者たちは、しばしば自らを縛る鎖を抱きしめて、それを除去しようとする努力に抵抗するものである。抑圧する者たちは、当然ながら、そのような努力を、歓迎しないだろう。彼らは、現在継続中の事柄から利益を得ており、その努力が、遅かれ早かれ自分たちの利益に影響すると、判断するからである。こうして、抑圧を除去する仕事に携わる者は、個人であれ集団であれ、抑圧される者から誤審される一方、抑圧する者からも誤解されて、いわば二つの火事の間で仕事をするようなものである。

もし人が、この種の労苦に携わろうとするならば、いくつかの資質が必要である。一つ、永遠の正義 (Eternal Right) が勝利することを、揺るぎなく信頼すること。二つ、人類の福利と全体としての進歩に、深く永続的に関心を持つこと。三つ、「この努力に携わらないならば、我に災いあれ」と語る、内なる促しがあること。この三つ

を熟考すれば、普通には祈りと呼ばれる心の状態になるであろう。請い願う者は、本質上、つぎのように感じ、あるいは述べる。「私がなし得る仕事を、示してください。私がそれをなし遂げられるよう、知恵と力を与えてください」と。その場合、すべての情緒の働きが呼び起こされ、働きたして、心からの仕事になる。その人は、攻めることのできない位置に立ち、阿諛追従に騙されることもなく、危険に脅かされることもなく、ただ信頼と愛と知恵に満ちて、働くべき時、朝方、静かな夜それぞれの仕事をなしつつ、着実に進む。そのような働き人は、つねに偉大な目的を抱き、仕事に相応しい性格の強さと、行動の原動力と、確固たる目的を備えるに至る。したがってまずなすべきことの一つ、人類を救済するために必須のことは、これまで述べてきたような性格をもった人々の階級を呼び集め、全面的に神聖化することである。たしかに、そのようなものはまず見当たらない。高貴な生命、献身的な心、純粹な思考、神聖な熱望を持った人を、ただ一人見つけるためには、時として、惑星一個を探す必要がある。彼あるいは彼女は、目的のために命さえ投げ出し、この尋常ならざる性格の人々の出現は、過去の歴史に記録されることになる。その人たちは世の光であるが、生存中はそれほど輝いて見えない。しかし、人類が彼らを理解できるほど成長すると、彼らの偉大さを見て、彼らの仕事の壮大さを理解し、彼らの努力の歴史を読む。世界は彼らの墓や埋葬地を飾り付け、大がかりな記念碑を築き、時代の恩人として賞賛を捧げ、生存中にもっとよく知られなかったことに涙するのである。

世界が今必要としているのは、いわば新たな世界の救済者 (Redeemer) を産み出すことであり、その人が出現するまで、救済はほとんど望めない。その救済者とはまず、イエスの愛、パウロの勇氣、ダニエルの忠実さ、アリストテレスの学識、ソクラテスの倫理、プラトンの教育、ウエブスターの知性、ブローガムの雄弁、ギュイヨン夫人の信仰を、駆使できる人である。現在の非常事態に対応するために、これらの要素はすべて必須のように思われる。

そのような人は自らの周りに戦力を集中して、同時代の卓越した人々の援助を求め、そればかりか、過ぎ去った時代 (yesterday) の卓越した人々の関心に訴え、その影響力を呼び起こすだろう。この力を自らの一身に集中したその人は、愛と真実と知恵の甲冑をまとい、大いなるまとめ役となって、前進するだろう。彼は、適材を適所に配置し、それぞれの努力をいかに結合すべきか、理想をいかに実現するかを指示し、魅力と親和性の法則を発見し、かくして労働は、自然で合意できるものとなるだろう。

この類の主題を見て、「このような大規模な仕事か、どうやって実行されるのか？」と問う人があるだろう。答えは、「人類の友たる者たちが団結すること (the band of man must unite)」である。比較的に恵まれた状況にある人々、職業や住居を変えらることのできる人々、この類の仕事に活動力を傾注できる人々が、自由のため、全人類の利益のため、内的な高貴さと神聖さのために、とくに聖別された地点に根を下ろし、より繊細な機能が最高度に発揮されるよう、その地点を耕すべきである。適格な要素を持った人々を、あらゆる国から探し出すべきである。これらの人々が集まってきた、入植地を立ち上げ、模範となる社会を築き、そこで善きものが生まれ、育ち、広がり、耕すことができるような状態を、創り出すべきである。好ましくない影響からすこし離れて、世界を今あるがままに見て、そこに欠如している必要物は何かがわかれば、ただ一つの手段によって、何かが成し遂げられるかもしれない。それは現在の人類の助けになるばかりでなく、人類の未来の利益をも増進することになるだろう。

世界の改革者 (the world's reformer) は、遅かれ早かれ、この仕事を始める必要があると、理解するに違いない。疑いもなく、アメリカ国は他のどの国にも増して、この種の仕事を開始するのに相応しい場所である。地所は容易に得られ、中心地区は経済的に購入することができる。これがなされるべき仕事だと理解できた人々は、まさにこの方向に、自分たちの努力を集中するだろう。当初は、必然的に、努力は大まかで単純なものになるだろうが、そ

れでも、正しい要素を含んでいる。心と頭と手を動かし、て植樹を行い、苦勞して水を注ぎ、強い関心と呼び起こし、より神聖で情感に満ちた働きを引き出し、神の魂を高め上げ、情愛を涵養する。この新事業は、いわば生まれ出ようと奮闘する、愛すべき子となるだろう。広範で博愛的で実務的な性格の諸計画が、明らかになる時がきたら、その時は、容易で自然な歩みを進めることができるだろう。

すでに一人の人物が、新世界のかなり広い地域を旅行してまわり、これらの教えを伝え、原理・原則を開示し、実践的な計画を公開し、著名な人々を呼び集めている。旧世界と新世界は、それぞれの努力を結合すべきである。この働きの一端を担うさまざまな国の興味深い人々の見解をもって、適切な時期に、選ばれた人々が、新世界から旅立ち、旧世界に上陸するだろう。

卿よ、スピリットの世界は、貴方に注目している。貴方の倦むことのない誠実さを知っている。貴方が円熟した老年に達したことを喜んでゐる。貴方が忙しく文書を準備していること、貴方がより高度でより神聖な状態に移ろうとしていることを、見守っている。われわれは、この文書を、貴方に向けて、今この時に送る。これを貴方の出版物に組み込むか、あるいは、この博愛的な性質を理解し評価できる人々の集会で読み上げるか、貴方の判断に委ねる。われわれは今回、貴方の判断への信任、貴方の誠実さへ信頼、人を人として援助したいという貴方の願望を知悉していることを、指導的な通信者の心を通して、表明する。

さらに、この好機にスピリットの世界が伝えたいのは、同じ型の知性と倫理を持った人々が、貴方の心に影響を与え、貴方の日々の歩みを導いている (Leading you onward)、ということである。卿よ、この記録文書が貴方に是認され、貴方の判断に叶うならば、選ばれた人々が旧世界を訪れた際に、然るべく取り計らっていただきたい。彼らの見解は、思想や感情や行動が相互に乗り入れたもので、その種の努力を促進することは、貴方にとって間違いなく最高度に喜ばしいものとなるだろう。いずれにせよ、貴

方のペンが認めた書簡は、この書面を直接伝達した人に歓迎されるだろう。

アメリカ合衆国マサチューセッツ州メルローズ  
一八五六年二月一六日      ジョン・M・スピア

### 3 スピリチュアリズムと社会主義の結合——人類の確かな未来

スピリチュアリズムと社会主義は、それらが原理において正しく理解され、実践のために十分に了解されるならば、世界の全住民を統治することになるだろう。その統治は、真実、結合、不偏の平等、慈善、愛、知恵によるだろう。

それらは人間のための新たな高められたあり方を創り出し、導入に反対しようとする矮小な試みをもものともせず、地上に永遠の至福千年期状態を、打ち立てるだろう。というのは、すべての人の目が開かれて、現在の誤った、人々を分裂させ、互いに嫌悪感を抱かせるようなシステムの愚行を、はつきり知る時代が、速やかに近付いているからである。この愚かなシステムによって、すべての人の性格が形作られ、世界中の社会が組み立てられてきた。

人間は幸福を欲する。すべての人の幸福を達成する手段は、すでに有り余るほどある。そして間もなく、この欲求を実現するための諸手段を正しく適応するよう、人類の知識は方向を指示すだろう。

永続する幸福の達成や、高度に理性的な喜びの生活を阻止する障害物は、さまざまな無知である。

人類的自然の諸法則に関する無知。すべての人の、善良で素晴らしい性格を形成する、原理と様式についての無知。すべての人のために、有り余るほどの富を創り出し、分配する方法についての無知。すべての人のために、素晴らしい性格と、有り余る富を形成するべき、よい環境を計画し、実行する方法についての無知。人類が互いに結び付くことができ、互いにとって魅力ある人となる、

そのようなただ一つの原理についての無知。これらの障害物が除去されることは、今やすべての人にとっての利益である。

しかし諸政府も人々も、それらをどう除去するか、まだ理解していない。それらを完全に了解すべく、政府も人々も、訓練されておらず、教育されてこなかったのである。すべての人は、自分たちが受けた訓練と教育に従って考え、行動する。彼らがそうするのは、現在の世界すべての諸国に見られるように、彼らの自然の法則に従っているのである。

諸政府と人々が私を支援して、これらの障害物を自分たちの中から除去する時が、また普遍的な結合、不偏の平等、知識、善良、知恵、すべてのものの卓越、高度な物理的で知的な幸福の喜びへと、歩みを進める方法を準備すべき時が、到来しつつあるのだろうか？

これらの重要な主題の研究と実践に、生涯を捧げてきた実践的人間の経験に基づいて、私は、我々の人間的自然の法則に関する無知が、除去される時の到来を、いかなる反論も恐れることなく、確信をもって断言する。すべての人の善良で優れた性格を形成するための、原理と方法に関する無知が、除去される。すべての人のために、有り余るほどの富を創り出し、分配する方法についての無知が、除去される。すべての人のために、善良で素晴らしい性格と、有り余る富を形成するべき、よい環境を計画し、実行する方法についての無知が、除去される。人類が互いに結び付くことができ、互いにとって魅力ある人となる、そのようなただ一つの原理についての無知が、除去される。そういう時が来たのである。

ではいったい誰が、人間的な進歩と幸福の障害物が除去されることを、妨げることから利益を得るのだろうか？ 同じく私の経験は、「けっして、誰一人も得ない」と答える。

この誤った、邪悪な、非常に狂った、今では擦り切れたシステム、人類を統治する愚行と不健康からなるシステムのうち、最も価値あるものでさえ、やがて到来する確固たる実体のある利点、進歩、楽



しみに比べれば、無価値な屑である。それらの良きものは、無知の原因を除去し、地上における高められた新たなあり方を適用することで、現れてくるものである。

古い既得権益は、腐敗と悲慘の下水溜である。これに對して、新たな権益は、すべての人に与えられ、しかも誰の権利にも危害を加えない。古い既得権益が少数者に握られているのは、すべての人の自然で正当な権利にとって、正反對の方向を向いている。

知識が増し加われば、無知と間違いからなる現在のシステムは、すべての国のすべての階層と階級にとって、本質的かつ永続的に有害である、ということが明白になるだろう。地球上のいたる所、地域の諸環境の先入見はきわめて根が深いので、それらはすべての人の理性的な力を圧倒し、破壊する。かくして、すべての人は現在、人間や社会をこの地域的な先入見を通して眺め、生涯とおして、自分たちが創り出した思考や行動の習慣によって統治されている。これまでのところ、これらの地域的な思考や習慣からくる先入見を、克服できるほど強力な影響力がなかった。

これらさまざまな地域性から、世界の諸国の国民性が形作られる。こうしてそれぞれの国は、自らの思考や習慣が真実で善良であり、他国に優越しているという信仰を、刻み付けられる。

この思考と習慣の地域的な先入見は、普遍的なものであつて、それを克服し得る唯一のものは、スピリチュアリズムと社会主義との結合から生まれる、知識の導入である。一方のスピリチュアリズムは、すべての人に、慈善と親切と愛の新たな精神を創り出す。他方の社会主義は、社会全体にわたって、結合された行動を新たに実践することで、不偏の平等を創り出す。

スピリチュアリズムはごく最近になつて導入されたものである。それはすみやかに増加してきて、今もなお増加しつつあり、やがて世界中に広がるだろう。

九七四年（初版一九三二年）、v – vi 頁。

- 2 同書、五〇〇頁。
- 3 同書、二二〇頁。
- 4 同書、一八六頁。
- 5 同書、二四〇頁。
- 6 同書、三〇四頁。
- 7 同書、五〇三頁。
- 8 同書、五一一頁。
- 9 五島茂『ロバート・オウエン』家の光協会、一九七三年、五二頁。
- 10 ロバート・オウエン、五島茂訳『オウエン自叙伝』岩波書店、一九七九年、三二八頁その他。
- 11 Robert Owen, *The Life of Robert Owen*, Gregory Claeys ed., *Selected works of Robert Owen*, vol. 4, William Pickering, 1993 [1857], pp. 38-46.
- 12 Robert Owen, "Spiritualism and Socialism united: the Certain Future of the Human Race," *Millennial Gazette*, No. 6, July 1st, 1856, pp. 26-29.
- 13 ロバート・オウエン、五島茂訳『解説』『オウエン自叙伝』岩波書店、一九七九年、四四二頁。

注

1 五島茂『復刻版・ロバート・オウエン著作史』東洋書房、一